2 人工受粉

作業の目的

さくらんぼは、同じ品種だけでは実をならせることができません。実をならせるためには、異なる品種（受粉樹※）の花粉を雌しべに付ける必要があります。このため、園地には同一品種だけでなく、異なる品種（受粉樹）を組み合わせて植えてあります。

一方、受粉樹があっても、開花期に低温や強風に遭うとミツバチ等の訪花昆虫の動きが鈍くなり、十分に受粉しない場合があります。

人工受粉は、毎年安定した収量を確保するために行います。

作業時期 **4月下旬**

受粉樹が開花し、主力品種「佐藤錦」の開花が始まったら、作業を開始します。

作業方法 **（毛バタキ受粉の場合）**

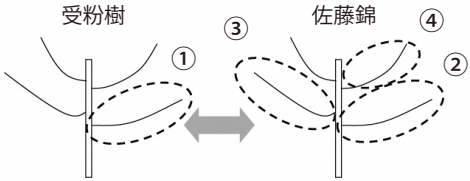
ア　人工受粉は、基本的に「佐藤錦」等の主力品種の花が樹全体の5分咲きになった時と、8分咲きになった時の最低2回行います。

イ　初めに毛バタキを回転させながら花をなでるイメージで、受粉樹の大枝1本分の花粉を取ります。（①）

ウ　次にこの毛バタキを回転させながら花をなでるイメージで、主力品種の大枝3本に花粉を付けます。（②～④）

エ　①～④の作業を繰り返し、主力品種の全ての大枝に花粉を付けます。

毛バタキを使った受粉作業



用語説明

※受粉樹（じゅふんじゅ）･･･主力品種の樹に安定して実をならせるため、主力品種の樹の近くに植える別品種の樹。主に「紅さやか」や「ナポレオン」など。

3 摘果（てきか）

作業の目的

葉の枚数に対して実の数が多すぎると、1つの実に分配される養分が少なくなり、果実が小玉になり、品質も低下します。

「摘果」は、大玉で糖度の高い果実を生産するために、果実が生長する前に余分な実を摘み取る作業です。

作業時期　**5月中旬から6月上旬**

生長の早い果実が小指の先端程度の大きさになり、自然に落下する小さい果実と区別できるようになった頃から作業を始めます。

作業の時期が早いほど、残された果実の肥大が良くなります。

摘果作業を始める時期の果実の大きさ

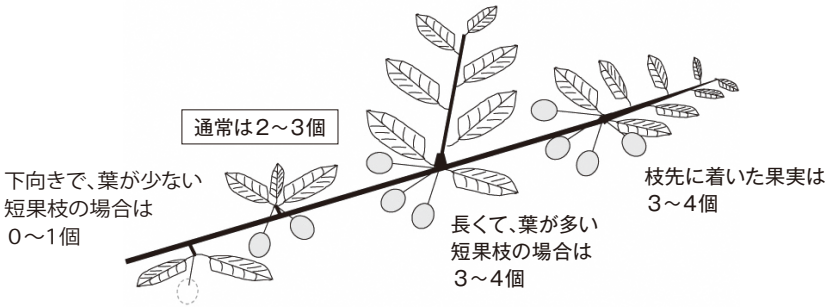
作業方法

摘果作業の方法には、①ハサミを使う方法、②手で摘み取る方法などがあります。

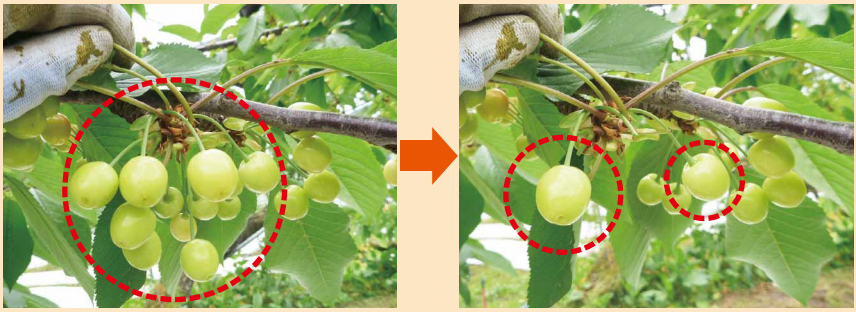
ア　作業は短果枝ごとに行います。

イ　1つの短果枝に着いた果実の中から、残す果実を選びます。

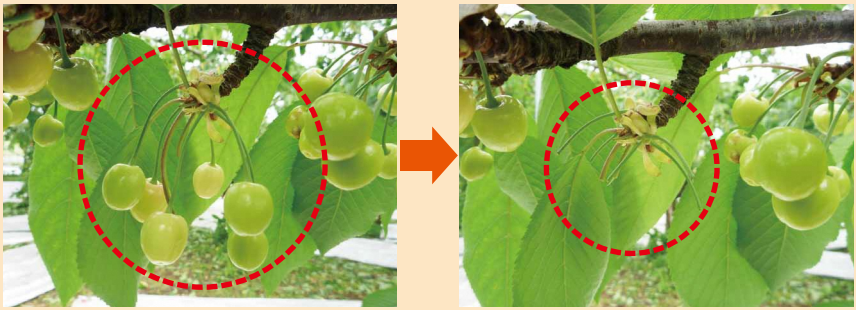
通常2～3個の果実を残しますが、残す数は品種、果実が着いている場所などにより異なります。残す果実は、軸が太く、大きな果実を選び、枝に接触している果実や双子果、病害果は摘み取ります。



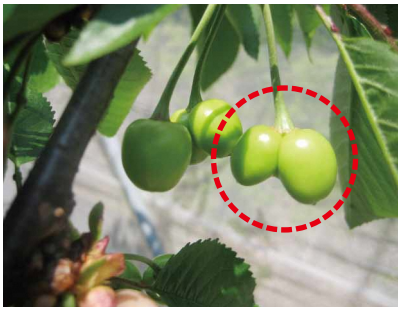
短果枝の位置による残す果実の数の違い



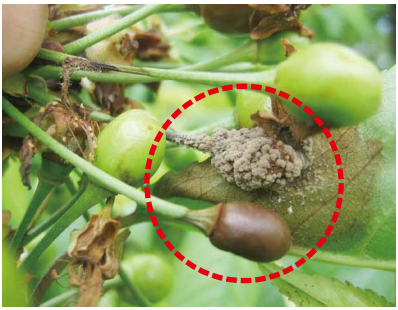
大きい葉が多く、横向きや上向きの短果枝の場合 → 2～3個残す



全体として着果量が多い樹で、葉が少なく、下向きの短果枝の場合 → 0～1個残す

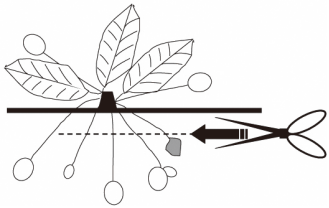


摘み取る双子果

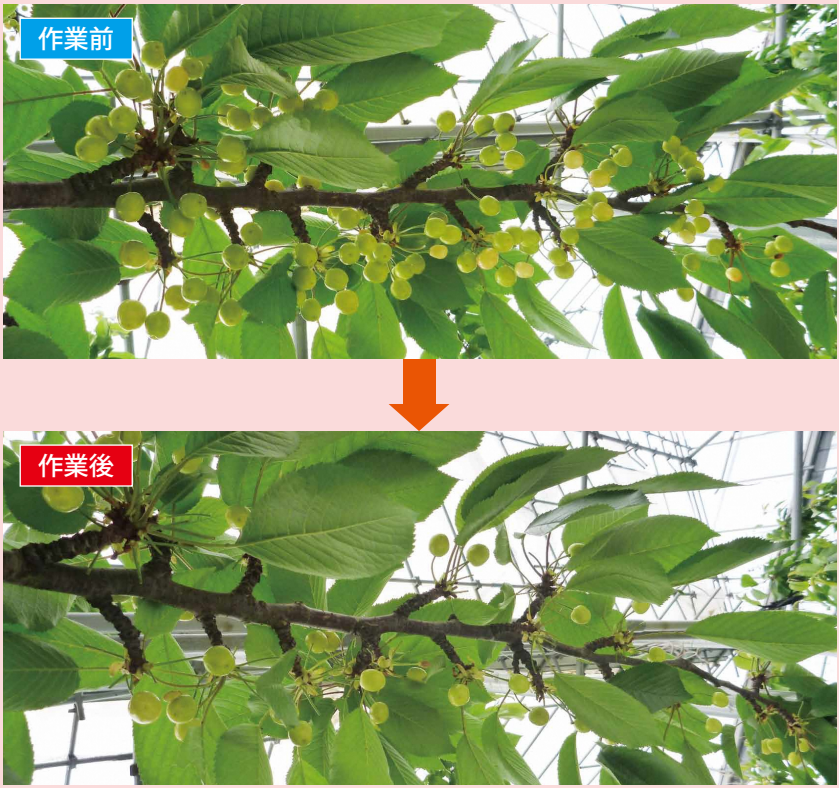


摘み取る病害果

ウ　横からハサミを入れて、残す果実を除き、軸の途中から切り落とします。



摘果作業前と作業後の比較（下から見た写真）



4 葉摘み（はつ）

作業の目的

色づきが良く、糖度の高い大きな果実をならせるためには、果実や葉にまんべんなく日光を当てることが大切です。

「葉摘み」は、果実への日当たりを悪くしている葉や、果実に接触している葉等を摘み取る作業です。

作業時期　5月末から6月中旬

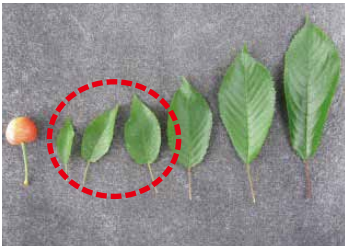
果実が赤く色づき始めた頃から作業を始め、収穫が始まる5～7日前まで終えるようにします。

作業方法

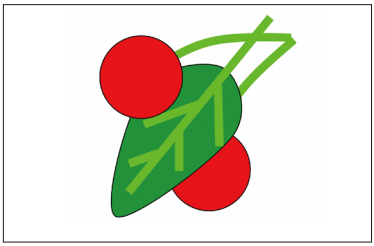
ア　1つの短果枝に最低でも大きい葉を4枚以上は残すようにし、手で摘み取ります。

イ　枝を下から見上げるようにして、マメ葉（小さい葉）や果実に挟まれた葉を摘み取ります。

注意：葉を摘み過ぎると、着色が悪く、甘みの少ない果実になります。

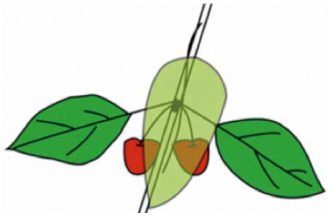


マメ葉（小さい葉）

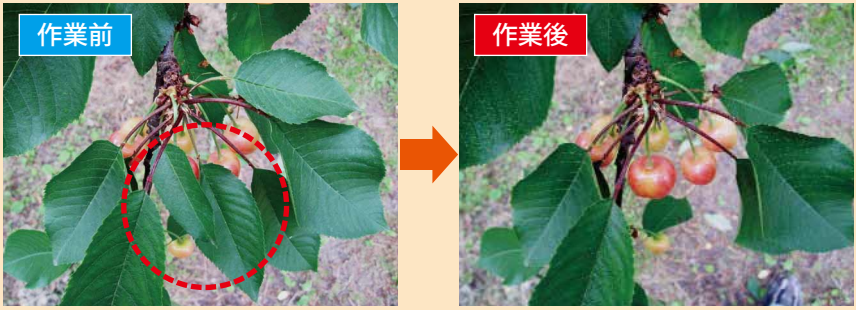


果実に挟まれた葉

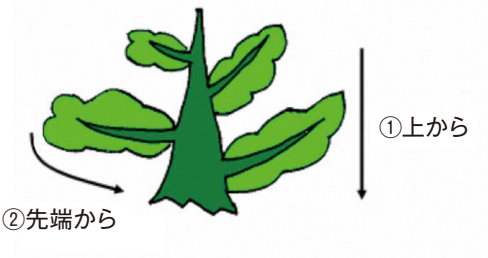
ウ　枝を上から見下ろすようにして、果実や枝に覆いかぶさった葉を摘み取ります。



果実や枝に覆いかぶさった葉



エ　葉摘みは樹の上部の枝から下部の枝へ、また一本の枝では先端から幹に向かって作業を進めます。



葉摘み作業前と作業後の枝の比較